

保育者養成短期大学における情報教育カリキュラム

松山 由美子
今井 亜湖

1. はじめに
2. 情報教育とメディアリテラシー
3. 幼児教育と情報教育
4. 情報化社会のなかの保育者として必要な資質
5. 保育者養成短期大学における情報教育の現状とその課題
6. 「保育者としてのメディアリテラシー」を育成する情報教育カリキュラム
7. おわりに
8. 要約

1. はじめに

近年の情報通信技術の発展にともない、「教育の情報化」が文部省をはじめとする各省連携のもとに進められている。これによって、情報技術(Information Technology)の利用者は専門家のみならず、この情報通信社会に生きるすべての人に拡大しつつあり、今後は子どもから高齢者までのあらゆる世代で情報技術の利用が予想される。

幼児教育の現場では情報機器、近年では特にコンピュータを子どもたちの遊び道具の一つとして取り入れていこうとする動きがみられる。平成10年告示の幼稚園教育要領(1999)では「多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにすること」が幼稚園教育の目的の一つとしてあげられ、特に、領域「環境」では「(10)生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心を持つ」とあるように、「情報」という明確な記述がある。

また、保育所保育指針(1999)に示されている保育の目標にも上述した幼稚園教育の目的と同様の内容が含まれている。「3歳児の保育の内容」から「6歳児の保育の内容」のねらいには「絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして」それぞれ各年齢ごとに「その内容や面白さを楽しむ」「イメージを広げ、言葉を豊かにする」「その内容

や面白さを楽しみ、イメージを豊かにする」「様々なイメージを広げるとともに、想像することの楽しさを味わう」とある。また、6歳児の保育の内容では他にも「身近な社会や自然の環境に自ら関わり、それらと自分たちの生活との関係に気づき、生活や遊びに取り入れる」とあり、身近になってきた情報化社会から子どもを隔離するような保育ではなく、情報化社会に関心を持ち、自ら関わることのできる子どもを育成することを保育士の姿勢と関わりの視点として示している。

現在の社会状況をふりかえると、幼児期に情報機器が他の遊び道具と同様、身近なものとして存在する子どもはますます増えてくると想定できる。それゆえ、幼児教育の現場における情報機器の取扱いは、保育に携わる保育者一人一人が考えなければならない課題といえる。

また、小学校から高等学校までの情報教育のあり方が、近年大きく変革されてきている。高等学校では教科「情報」の設置が決定し、その実施のための準備が進められている。今後は各学校段階においてコンピュータを用いた活動が積極的になされるであろう。そうなれば、ワープロと表計算などの基礎技能を身につけた学生が入学することになるため、このような基礎技能の修得のための授業は短期大学で行う必要性がなくなる。短大で

行う情報教育とはどのようなものであるべきかが問われる時代はすぐにやってくるだろう。

以上で述べた社会的背景と、情報通信社会における幼児教育現場の現状をふまえ、筆者は、保育者養成機関の一つである保育者養成短期大学の情報教育カリキュラムの開発をすすめている。この情報教育カリキュラムを開発するにあたり、まずは、情報教育、および情報教育で培われるべき「メディアリテラシー」がどのようなものかを先行研究より明らかにした。なぜなら、短期大学の学生たちは限られた時間の中でメディアリテラシーを獲得しなければならないからである。

さらに、保育者養成短期大学における情報教育の現状とその問題点を明らかにした。

そして、将来、保育者となる学生が情報社会で求められる力を含めたメディアリテラシーを獲得できるような保育者養成短期大学における情報教育のあり方について検討を行ない、半期のカリキュラムを構成した。このカリキュラムの評価は、このカリキュラムにそった講義を受けた学生のアンケートにより行い、改善を加える。

本稿では、第一に、情報教育およびメディアリテラシーについて概観し、その定義を行う。

第二に、保育者養成短期大学をとりまく現状を、幼児とコンピュータの問題および保育者養成カリキュラムにともなう問題の二つの側面から述べる。

第三に、保育者養成短期大学における情報教育の現状とその課題を先行研究より明らかにする。

そして最後に、これらをふまえ、保育者養成短期大学の情報教育のあり方について述べ、実際にカリキュラムを構成し、その実践を評価することで、よりよい保育者養成短期大学の情報教育について考察する。

なお、本稿の「保育者」という語は、幼児教育に携わる保育士および幼稚園教諭の総称として使用する。

2. 情報教育とメディアリテラシー

2-1. これからの情報教育

情報教育の重要性は、学習指導要領においてますます重要視されている。文部省の「情報化の進

展に対応した初等中等教育における情報教育の推進に関する調査研究協力者会議」でも情報教育の重要性を指摘し、具体的な学習の方法を提案しており、ここでの提案が学習指導要領の情報教育に関する記述に大いに示唆を与えている。たとえば、高等学校における新教科「情報」の設置や中学校の技術家庭科における「情報基礎」「情報応用」分野の設定があげられるだろう。

しかし、さらに大切なことは、情報教育の目標を次の3点に整理したことである(田中, 2000)。

- ① 情報活用の実践力
- ② 情報の科学的な理解
- ③ 情報社会に参画する態度

ここで改めて認識しないといけないのは、情報教育が単なる情報機器の操作や技能の修得を目的としているのではないということである。先述したこれからの情報教育で大切にされるべきものは次の3点である。

- ① 情報を主体的に処理し、判断し、表現し、発信できる能力
- ② さまざまな情報手段の特性を理解し、情報を適切に扱い、普段の生活における自分の情報活用を評価する能力
- ③ 社会生活の中で情報や情報技術の果たす役割・影響を理解し、情報モラルについて考え、望ましい情報社会の創造に参画する態度・能力

このような能力育成のため、さまざまな情報教育が、今後も学校教育機関で行われることになるだろうが、特に小学校段階では「慣れ親しむ」とこと「総合的な学習の時間での積極的で自主的な活用」を明示している。情報機器の操作や技能を評価するのではなく、メディアへの態度や情報の活用を重視しているのである。

さらに、21世紀に向けての情報教育について、Idet Harelは講演で「3つのEを大切にする情報教育」を提唱した。この「3つのE」とは、以下の通りである。

- ① Explore : 検索、探索、調査、
(探求活動) 情報収集
- ② Express : 表現、作品制作、
(表現活動) プレゼンテーション
- ③ Exchange : 交流、意見交換、
(交流活動) コミュニケーション

この3つのような活動のためには、情報を単に理解し処理する能力だけでなく、さまざまなメディアの特性を理解した上での組み合わせやより効果的なメディアの選択と活用能力や、発信する自分以外の「受信する相手」を意識したコミュニケーション能力の育成が必要とされる。

以上見てきたように、今後の情報教育は、単なる情報機器の操作にとどまることなく、いかに情報に対して接していくか、また、メディアをとおしていかに他人とコミュニケーションをとっていくか、という力を育成していくべき教育であると言える。

2-2. メディアリテラシーの定義

現在までに、情報社会を生きるために必要であると定義された資質は多く存在する。これらの先行研究より、代表的な資質と考えられ、かつ2-1で述べた情報教育の目的にも通用すると思われるものを列挙すると、表1のとおりである。

従来のメディアリテラシーや情報活用能力と呼ばれるものには、単にコンピュータをはじめとしたメディアを活用する能力という狭義のものも存在したが、現在では、社会的構成主義の影響を受けて、情報を「正しく」理解することよりも、受信した情報を学習者がいかに批判し、分析し、理解するかのプロセスを重視し、情報の処理を主体的に行うことを重視する方向へ視点が変わってきている。

同時に、学習観が個人学習からネットワークでの学習やプロジェクト学習の方向へ変わってきたことを受けて、情報発信の際にいかに相手を意識

した表現、発信ができるかを重視する方向へと発展してきたと言える。

3. 幼児教育と情報教育

3-1. 幼児教育現場における情報教育の現状と捉え方

これまでに述べた情報教育重視の流れは、小学校以上の教育にとどまらず、幼児教育の現場にも影響を及ぼし始めている。情報教育の目的とは関係なく、少子化のあおりを受けて、園児獲得の一環として、早期教育としてメディアを取り入れる幼稚園も出てきた。現在では保育現場におけるメディア否定観が圧倒的に優勢であるが、近年の社会における情報化の流れは、幼児教育にもコンピュータをはじめとしたメディアを積極的に取り入れ、幼児期からもコンピュータに慣れ親しませようという動きをうみだしつつある。

このような動きに対し、HEALY(1998)は、幼児期を含む2歳から7歳までの時期に習得される重要な発達課題である7つの学習(社会的かかわりの中での学習、すべての感覚を使う学習、意欲的な学習者になるための学習、注意を向ける学習、視覚的イメージと記憶の学習、論理的思考の学習、新しい記号体系の学習)が、いずれもコンピュータなどの電子的刺激が多すぎると、その発達に支障が生じると警鐘を鳴らしている。

砂上(1998)は、保育にコンピュータをとりいれる場合の問題点を「子どもが保育者の指示通りに使うだけの受動的な態度ではなく、コンピュータの役割や機能を子どもなりにわかり発見していく能動的な態度が子どもに育っていかなくてはか

表1. 情報社会に必要な代表的な資質

マルチメディアリテラシー	多様なメディアを組み合わせ活用する能力 (田中, 1995)
メディア・リテラシー	情報を批判的に分析し、メディアの持つ特性を理解し、メディアをコミュニケーションのツールとして積極的・自発的に活用する能力 (菅谷, 2000)
メディア・リテラシー	市民がメディアを社会的な文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創りだす力。また、そのような力の獲得をめざす取り組みも含む (鈴木, 1997)
情報活用能力	情報及び情報手段を主体的に選択し活用して行くための個人の基礎的な資質であり、情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度のつから成り立っている (文部省, 1998)

えって弊害をもたらす。」と指摘している。さらに、幼児期からコンピュータに触れることが、その便利さゆえに発達を支える素朴な原体験を省略することにならないかどうか留意しなくてはならないとも述べている。

一方、瀧川ら(1998)は、保育にコンピュータを利用した実践研究報告と、自身の実践報告から、「コンピュータは遊具の一つ」および「コミュニケーション能力が増幅する遊具の一つ」として位置づけ、幼児教育へコンピュータを導入することに肯定的な立場を示している。しかし、「遊具としてのコンピュータ利用(CAP)」を提案した松田(1989)は、コンピュータの遊具としての問題点も指摘している。すなわち、「パパートは、とにかく子どもにまかせておけばよいとしている。しかし、現実には、ただコンピュータを与えておくだけでは行き詰まったり飽きたりするという状態が必ず起きてくる。そこには保育者の介入が必要となるかも知れない。」と述べている。また、10年ほど前から幼児教育にコンピュータを導入して実践報告を行っている小川(1997)も「保育者が誘導することによって他の遊びに発展したり、コンピュータでの経験が他の場面で活かされる場面は観察されたが、コンピュータ遊び自体が幼児の他の遊びや活動を促すことはなかった。」と、松田同様にその問題点を指摘している。

さらに、堀田・潟辺(1999)は、幼児が親子でマルチメディア遊びをする際の観察から、幼児がマルチメディアに接する際の保護者の意識や行動が幼児の主体的なメディア活用態度に大きな影響をおよぼしている、という指摘をしている。

筆者が行った研究(2000)では、幼児がメディアで遊ぶ時には、メディアそのものの持つしつけや魅力が子どもたちの遊び・活動を広げたり深めたりすることがあるが、むしろメディアそのものよりも、一緒に遊ぶ子どもたちどうしのコミュニケーションがその後の活動や子どもたちの遊びの楽しみを深めたり広げたりすることに大きな役割を果たしていることが明らかになっている。そのため、メディアを用いた活動が子どもたちの現実世界といかに関連しているか、保育者がどのような環境設定でメディアを幼児に使わせるかを考えることが大きな鍵となることを示唆した。

また、幼児教育へ積極的にコンピュータが導入され始めたのは近年であるため、コンピュータが幼児期に及ぼす影響に関する研究は少ないのが現状である。そのため、現時点では幼児教育へのコンピュータ利用が適切か否かを判断することはできない。

しかし、現場で幼児とともにいることになる保育者が、保育する対象である幼児の発達にコンピュータの利用が必要か否かを、適宜保育者自身で見極めながら、幼児教育へのコンピュータ利用を模索していかなければならないことは明らかである。

3-2. 保育者養成における情報教育の現状と捉え方

社会から期待される短期大学の役割について、梅宮(1999)は「より即戦力になる人材の育成」をあげ、学生本人もそれに応えようというモチベーションがあると述べている。学校教育法を見ると、短期大学の教育目的には「職業又は实际生活に必要な能力を育成することを主な目的とする」旨が記載されている。したがって、保育者養成短期大学の役割とは、幼児教育現場において必要な能力を育成し、より即戦力となる人材を育成することであるといえよう。

以上の特性より、保育者養成短期大学の授業カリキュラム(以下、保育者養成カリキュラムとする)は、保育士および幼稚園教諭免許取得を念頭においたものとなっているため事実上必修の教科目数が多くなり、学生には教育実習および保育実習とこれらの必修科目を2年で履修しなければならないという過酷な時間的条件が与えられる。

今回の教職免許法の改訂にともない、幼稚園教諭免許取得のために「情報機器の操作および情報教育」が必修科目に加わった。また、平成14年度から施行される保育士養成カリキュラムの改定案にも情報教育に関する科目が選択必修として扱われる可能性がみえてきた(全国保育士養成協議会, 2000)。したがって、保育者養成カリキュラムの過密さは増すのは必至であると考えられる。

保育現場における情報教育の軽視感や否定感も手伝って、多くの保育者養成機関では視聴覚教育の中にコンピュータの話を1コマ入れて終わりに

するところや、「とにかく技術だけでも習得させたい」ということでワープロや表計算といった基礎技能の修得のみにとどめるところも多い。

特に短期大学における情報教育の現状に関しては後述することにして、現実的には、カリキュラムの過密さによって、学生が免許に関係する技能を習得することのみを追い求めるという現状を考えれば、それもいたしかたない部分もあるかもしれない。しかし、将来保育者として幼児教育に携わらなければならない学生にとって、このような現状はよいのだろうか。保育者として必要な情報教育について考えなければならない時期がきているのではないだろうか。

情報通信社会に対応する保育を求められる一方で、保育者養成短期大学をとりまく現状は厳しい。より即戦力となる幼児教育の「エキスパート」を輩出するためには、社会の変化にすばやく対応をすることができる力を持った保育者を育成できる保育者養成カリキュラムが必要である。特に、現在のような情報通信社会においては、保育者養成短期大学における情報教育の現状を見直し、過密なカリキュラムの中で、将来保育者になる学生たちが、短期間でも情報を扱うことやメディアの本質にふれることのできる情報教育について考える必要がある。

4. 情報化社会のなかの保育者として必要な資質

佐伯(1998)は、情報通信社会の教師の役割を「教師は知識の伝達者ではなくなる。子どもたち一人ひとりが自らの学びの道筋を見出し、学習共同体の実践に参加していくことの橋渡しをするのが教師だということになる。そこで、教師は、さまざまな教科の背後にある、文化的実践に子どもたちを参加させることが授業での教授活動だということになる」と述べている。すなわち、情報通信社会において教師は、「学習環境のコーディネータ」としての役割を果たす。

しかし、幼児期の子どもには自らの学びの道筋を見つけることはできないため、その多くが保育者の判断にゆだねられる場合が多い。前章の3-1で述べたように、保育現場で幼児がコンピュータを使うことができるか否かは、保育者の判断に

左右される。また、幼児にコンピュータを遊具の一つとして与えた場合にも保育者の介入が必要となるため、学校教育における教師の役割と異なってくる。すなわち、保育現場における子どもたちの活動に関して小学校以上の教育現場より大きな決定権や影響を与えることになる。

そのため、保育者は固まった価値観にとらわれることなく、社会の現状や保護者、子どもたちそれぞれの考えを柔軟に受け止め、コミュニケーションによって彼らを理解しながら、子どもたちをよりよい方向へ導く力が必要となってくる。

以上のことをふまえて、これからの情報社会における保育者として必要な資質を定義し、それに則った保育者養成カリキュラムが必要である。

筆者は保育者養成機関の情報教育で育成しなければならない力は「保育者としてのメディアリテラシー」であると考えた。すなわちそれは、柔軟な保育観に基づいた「保育場面において、メディアをクリティカルに分析、評価できる力であり、自分の考えをメディアによって表現したり、メディアを利用することで多様なコミュニケーションを行うことができる力」である。

この「保育者としてのメディアリテラシー」を育成するために、どのような情報教育を展開していく必要があるのか、保育者を養成する短期大学の現場や、保育者をめざす学生の現状をふまえて検討し、カリキュラムを開発する必要が早急に必要であると考えられる。

5. 保育者養成短期大学における情報教育の現状とその課題

5-1. 保育者養成短期大学における情報教育の現状

短期大学の保育科の専門科目として、「幼児のための情報教育」あるいは「保育現場で役にたつ情報教育」という観点で講義がなされることは、前章で述べたような保育者養成カリキュラムにもなう時間的制約や、幼児教育とコンピュータの問題、あるいは、幼児教育現場での情報教育への軽視感といった理由から非常に少ない。

そこで、過去3年間の短期大学の紀要や学報などから、メディアを用いた授業実践に関する論文や報告集などを概観し、実際にどのような情報教

育が行なわれているか、またメディアを用いた授業はどのような形でなされているのかを調査した。

その結果、英文科や経営学科といったパソコンを使うことが日常的に要求される学科もある短期大学の保育科では、情報教育は専門科目ではないが一般科目で比較的行われているようである。しかしそれは、技能としてのワープロや表計算の能力を習得する授業であったり、英語の授業にLL教室のかわりにマルチメディア教室を使って学習させるような授業（例えば、一宮女子短期大学、沖縄キリスト教短期大学、愛知みずほ短期大学）であることが明らかになった。さらに保育科に絞り、保育科の専門科目に目を向けると、若干ながらではあるが、音楽の授業において楽譜作成や作曲の学習にMIDIを使用する実践（例えば、大阪成蹊女子短期大学、聖和大学短期大学部、秋草学園短期大学）や、また数は少ないが、美術の授業で簡単なコンピュータグラフィックスを用いた授業を行う（例えば、大垣女子短期大学）といったことが行われていることが明らかになった。

5-2. 保育者養成校における情報教育先進校の事例

次に、本研究が意図する、保育士としてのメディアリテラシー育成ができる授業に近い特徴的な実践例を3校あげる。

聖和大学短期大学の保育科では、音楽や英語の講義にメディアを取り入れるだけでなく、教育実習データベースを作成して活用している（CHIBA他、1996、加納他、1997）。学生にデータを入力させるようなシステムを開発し、保育実習法の授業で入力させている。現時点では、この開発したシステムを使用した後の報告は見当たらないが、この実践は実習という学生が興味を持ちやすい題材で、簡単な文字入力能力を学習者に身につけさせられるのではないかと考える。また、教育実習データベースの実践は大阪芸術大学短期大学部（旧浪速短期大学）でも、授業ではないが、学生の自主活動として行われている。

浜松短期大学では、保育科の中でも情報教育を行っている数少ない短期大学の一つである。ここでは、ワープロや表計算、描画といった幅広い内

容が授業で扱われているが、学生の希望を考慮し、今後はさらにメールやインターネットを用いた「ネットワーク教育」へ授業を展開しなければならないという結論を出している（山本・佐野、2000）。しかし、いずれにせよ、この実践では基礎技能の修得と学生の興味・関心に重点が置かれており、なぜ保育科で情報教育を行うのか、というところまでは考慮に入れて授業内容を精選していないように思われる。

しかし一方では、数少ないながらも「幼児教育における情報教育」を見据えた授業を行っている短期大学も存在する。

大阪成蹊女子短期大学では、作譜能力を補助するためにマルチメディアを活用しているが、その際には、自分で作った幼児用の絵描き歌を作曲することや、それを作品として絵をつけて印刷するところまでを目標とした授業を行っている（兼房、2000）。しかし、マルチメディア活用を幼児教育現場向きの表現活動の一つとして活用させているだけにとどまっており、幼児教育でなぜマルチメディアが必要なのかを学生に考えさせる機会までは設けていない。幼児教育における情報化についてまで触れないと、「幼児教育における情報教育」を行ったとはいえないのではないだろうか。

大阪芸術大学短期大学部の幼児教育科では、幼児教育における情報教育を見据えたシステムを構築している（村上・倉戸ほか、1999）。また、授業内容も幼児がパソコンで遊ぶための教材の作成という作業を通して、描画、文章入力、音楽といった基礎技能を修得させるようになってきている。さらに、基礎技能の修得だけでなく、教材の作成を目標とすることにより、学生が幼児教育へコンピュータをいかに取り入れていくかを考える機会にもなっている。

先に述べたデータベース作成だけでなく、ゼミの選択によっては自作マルチメディア教材を実際に幼児に活用させた実験なども行われている。このような充実した教育を行うことができる要因の一つに、保育科全体のカリキュラムにおける情報教育分野の授業の充実が挙げられる。半期選択科目の「基礎情報学」、通年必修科目の「視聴覚教育」、さらに通年選択科目「コンピュータ」が1年生時で学べるようになってきている。さらに2年生で

は通年科目「コンピュータ」のアドバンスドクラスにあたる「総合演習」つまりゼミで情報教育に関する講座が開講されている。短大でここまで情報教育を充実させたカリキュラムを組むのは極めてまれで恵まれた例である(大阪芸術大学短期大学部, 2000)。

5-3. 保育者養成短期大学における情報教育の課題

すでに述べたように、保育者養成短期大学におけるメディアを用いた教育の実践報告は増えてきてはいるが、まだ、それらの内容が保育科におけるメディア教育の理念を実践したものというものは数少ない。

そこで、保育科におけるメディア教育の意義を問い直すことで、保育者養成短期大学が抱えている情報教育に関する課題を述べる。

小平(1997)の調査によると、幼稚園や保育所における各メディアの利用度に関する質問調査の結果には今でも1位に絵本、2位に紙芝居がきている。そして、3位によくニューメディアの一つであるビデオ教材という回答が出てくる。つまり、保育科におけるメディア教育の第一の意義は、保育現場での、また一般的な保育科学生を持つ「メディア」の捉え方や考え方の幅を広げ、多様な価値観と知識とを習得させることである。これは、これからの情報化社会において保育を行うために必要な力であるといえる。また、絵本という親しみのある教材をメディアとして捉えなおすことによって、その活用法を見なおしたり、今までの保育そのものを見なおす契機となるだろう。

市川(1997)は自身の保育科での講義の実践において「幼児がパソコンを使うこと」についてのディベートを保育科の学生にさせることにより、「学生が本来持つ保育観を見なおさせ、保育者が持つ保育観が保育現場で、さらには子どもたちの価値観の形成に大きな影響をおよぼすことを考えさせるようにしている」と述べている。この市川の考え方は、保育科で情報教育を行う際に必要な考え方の一つではないだろうか。

したがって、保育科におけるメディア活用のための講義を考える場合、一般的な「メディアリテラシーの育成」だけではなく、「メディア」そのもの

のについて考える機会でなければならず、ひいては保育者としての柔軟で多様な価値観や保育観を形成できる機会であることが重要なのである。

しかし、短期大学での保育者養成カリキュラムにおける情報教育の現状を考えると、コンピュータをはじめとする情報機器に拒否反応を示す学生(そのほとんどが初心者である)が多く、現時点では、コンピュータの基礎技能の習得を優先しないといけない状況がある。保育者として「メディア」や「情報」に関する多様な価値観、そして社会人として、また保育者としての情報活用能力の両方をできるだけ効率的に習得させることが短期大学では避けておれない課題となり、またこれが早急に実現させなければならない課題となっているのである。

しかし、宮川・村野井(1999)は、仁愛女子短期大学幼児教育学科の半期科目「教育方法論」の授業において、時間割、案内状、実習園の案内地図の作成および表計算の実習だけでなく、幼児教育・保育現場における幼児用コンピュータの評価を学生にさせる授業を行ったが、学生自身のコンピュータ操作への不安や、教育現場への情報教育導入に対する否定観を変えることができなかったという結論を出している。このように、半期では、特にメディア否定観の強い保育者をめざす学生の意識や価値観を広げたり深めたりすることは非常に難しいといえる。

以上にみられる先行研究より、保育者養成短期大学の情報教育の課題は大きく次の三つに要約できる。

- ① 授業カリキュラムがコンピュータを利用するための基礎技能の修得に重点が置かれており、今後は保育科における情報教育の役割を考慮した情報教育カリキュラムの開発が必要である。
- ② 情報教育によって、一般的な保育科学生を持つ「メディア」の捉え方や考え方の幅を広げ、多様な価値観と知識とを習得させなければならない。
- ③ 一般的な「メディアリテラシーの育成」だけではなく、「メディア」そのものについて考える機会でなければならない

したがって、今後の保育者養成短期大学におけ

る情報教育は、上の三つの課題を克服するためのカリキュラムでなければならない。つまり、先の第4章で述べた「保育者としてのメディアリテラシー」の育成を目的とした情報教育カリキュラムである。

6. 「保育者としてのメディアリテラシー」を育成する情報教育カリキュラム

6-1. 情報教育カリキュラムの作成と意図

先行研究から得た知見をもとに、筆者が担当する短期大学1年生の半期科目「情報機器の操作」における情報教育カリキュラムを共同研究者たちと話し合いの上、作成した。カリキュラムの目標および内容は以下の通りである。

- ① 目標:「保育者としてのメディアリテラシー」を獲得する。
 - ・ワープロ、表計算、描画ソフトの基本操作を習得する。
 - ・保育について、保護者や子どもを意識しながら関心を広げたり深めたりする。
 - ・グループワークを通して、グループ内、グループ間のコミュニケーション能力を高める。

② カリキュラム

カリキュラムに関しては、表2のとおりである。また、表2に示された内容を、2000年4月から7月にかけての半期で行った。

③ 受講した学生について

名古屋柳城短期大学保育科1年生 92名
(全員女子)

- ・携帯電話やPHSをといた情報機器に接している学生は多く、メールのやりとりも活発に行っているが、i-modeをはじめとした携帯電話によるインターネットサービスを活用する学生は少ない。
- ・1回でもパソコンを以前に使ったことがある学生は全体の8割に達したが、ほとんどがコンピュータに対して不安感を持っている。
- ・約7割の学生は「保育にパソコンをはじめとするメディアは必要ない」と答えている。
- ・しかし、ほとんどの学生が「今どき、先生はパソコンぐらい使いこなした方がいい」という考えを持っている。

6-2. 開発した情報教育カリキュラムの問題点とこれからの課題

まず、今回のカリキュラムが実際にどのように進められたかについて述べておく。

オリエンテーションが1時間あった後、おたより作りに約2ヶ月を要した。その後、2回の発達記録表作りの授業を行った。保育現場とメディアに関しての講義は1回で、事例を簡単に解説するのみにとどめ、後は自習課題とし、自分で保育現

表2. 作成した情報教育カリキュラム

オリエンテーション	基本的な操作方法、教室の使用法、授業の進め方の説明など
おたより作り	ワープロの基本操作、描画の基本操作 絵の配置や文章とのバランスを考える おたよりを通して、保護者との連携、コミュニケーションを考える 自分の保育観をいかに他人に伝えるかを考える
発達記録表作り	表計算ソフトの基本操作 発達の記録を通して、幼児の発達、保健への興味を深める 子どもの発達のとらえ方を考える 子どもの発達を通してプライバシーについての考えを見直す
保育現場とメディア	保育現場にメディアが導入された例を学ぶ。 現代社会と保育とのつながりを考える。 自分の保育観をメディア教育をとおして見直す。
グループ課題	保育に関するテーマについてグループで課題解決学習を行う グループで協力して課題を解決する。 保育に関する知識を深めたり、広めたりする。

場にコンピュータをはじめとしたメディアが存在することに対して考え、その結果をレポートとして提出させた。残りの授業2回でグループ課題学習を行い、最後の1時間で発表会を行った。

結果的に時間配分がうまくいかず、授業実践者としては最後が消化不良になったが、全体としてこのカリキュラムは受講者である学生にとってどのようなものであったかを明らかにするために、①学生による無記名のアンケート、②研究協力者によるフィールドワーク、③授業実践者によるリフレクションによって今回のカリキュラムの問題点、および今後の課題を抽出した。

学生による無記名のアンケートでは、基本操作の理解度や、興味関心の度合い、グループ活動への態度を自己評価してもらった。その結果、絵と文章を一つにまとめることに10%の学生が、印刷の仕方に4%の学生が分からなかったと答えるのみでほぼ100%に近い学生が基本的な操作に関しては理解できていると自己評価していることが明らかになった。

また、フィールドワークの記述や授業実践者も指摘しているが、学生がかなり苦勞していたパソコンで絵を描くことに関しても72%の学生が「好き」と答えており、ゆっくり時間を使って思う存分描けたことで満足感を得ていることが分かった。また、質問も多く、グループ内でも教え合いがさかんだった表計算についても、「習った以外の表計算の使い方も学びたいと思った」に86%がそう思ったと答えており、学生たちの中に、基本操作の理解だけでなく、活用への意欲もみられることが明らかになった。

活用への意欲をさらに高めた点として、「おたより」「発達記録表」という内容があったことも忘れてはならない。おたよりに関しては、遠足の場所、集合時間から保護者に伝えるべき内容、文章をすべて自分たちで考えて作ることで、あらためて「保育のねらい」について考え直したり、保護者に失礼のない文章表現や一般常識について振り返る機会となっていたし、発達記録表についても5歳児の平均身長や体重という考え方から、肥満についてや、プライバシー、発達の遅れなどの問題にどう対処していかなければならないのかを考えるよい機会となっていたことがフィールドワー

クの記述から明らかになった。授業者が学生たちは保育に直結する内容を活動に先駆けて話題として提供することで、保育に関しての関心も高まるだけでなく、パソコンを使った活動に関してもじっくりと取り組めるようである。

さらに、グループ活動についても全員が「協力して作業を行えた」と答えており、さらに「他の人が授業で作った作品を見てみたい」という項目にも86%が「見たい」と答えており、「どちらでもよい」を合わせると99%の学生が見たいと思っいることが明らかになった。自分の活動、グループでの活動を通して、他の友達と交流したいという思いが生まれてきていると評価できるのではないだろうか。学習態度についても、ほぼ全員が高い自己評価をしており、自分にあまい評価をしているというよりも、むしろ、自分なりに苦手意識を克服しようと頑張ったことや、自分なりに達成感を味わい、満足した気持ちが自己評価を高くしたのではないかと考えられる。

実際にはどうしても他のメンバーに頼ってしまう学生がいたグループや、評価を気にしすぎてグループのメンバーの分担分までやってしまう学生がいたグループもあったが、どのグループも、短い期限で、全員で一つの課題をなんとかかよりよいものに仕上げようとしていたことはフィールドワークや授業実施者のリフレクションからも明らかになった。

さらに、自由記述やレポートからは「今までパソコンは絶対保育とは関係ないし、必要ない」と思っていた学生の多くが、「絶対ということはない。使い方次第であってもよいのではないか」と保育に対する考え方が柔軟になり、情報教育に関する固い価値観が壊れ、やわらかくなっているのではないかと思われるところがみられた。カリキュラムの目標は半期でも達成できる見通しが出てきた。

しかし、アンケートの自由記述には「もっとゆっくりやってほしい」「ノートが完璧に取れなかった」「グループ学習にもっと時間がほしかった」という意見が多くみられ、カリキュラムの時間配分に関する問題点や、カリキュラムを円滑に進めるためのシステムの必要性が明らかになった。

7. おわりに

本稿は、保育者養成短期大学における情報教育の現状とその課題を、先行研究を概観しながら明らかにし、保育者養成短期大学における情報教育のあり方を実際にカリキュラムを開発し実践することで検討した。現在は、本稿で検討した情報教育実践の結果をもとに、保育者養成短期大学における「保育者としてのメディアリテラシー」を育成する情報教育カリキュラムの改良とこのカリキュラムを支えるシステムの開発を行っている。今後は実践を通して評価を行う予定である。

8. 要約

教育の情報化は幼児教育の現場にも影響している。それに伴い、幼稚園教育免許を取得するために「情報機器の操作および情報教育」が必修単位となるなど、保育者養成に情報教育は避けて通れないものとなった。そこで、本研究では、情報教育、またそこで培われるべきメディアリテラシーについて先行研究により整理した。さらに、事例や先行研究より保育者養成短期大学における情報教育の現状とその課題を明らかにし、将来保育者となる学生が情報社会で求められる力を含めて、保育者養成短期大学における情報教育のあり方について検討を行なった。

さらに、これらの先行研究をもとに、実際に保育者養成校における情報教育カリキュラムを開発し、短期大学で「情報機器の操作」という半期の授業を行った。講義を行うにあたっての経緯と問題点を挙げ、次の課題を提示した。現在は、その課題を克服するためのシステムを構築し、カリキュラムの改良を行い、実践を始めている。今後は、実践を通してそれらの評価を行う予定である。

謝辞

本研究は「保育者養成短期大学における情報教育に関する研究」の一部である。この研究を遂行するために、大阪大学大学院の山城新吾くんには、カリキュラムを支えるシステム開発に必要なUNIXサーバの構築およびシステム動作環境の開発で多大な協力を賜りました。記して感謝します。

さらに、授業実践をまとめた短大の資料提供やインフォーマルインタビューに快く応じて下さった大阪芸術大学短期大学の村上優氏に心より御礼を申し上げます。

参考文献

- 有岡登美 (1998) 「テキストデザイン授業におけるコンピュータ導入について—表現力の可能性を求めて—」『大垣女子短期大学教育紀要』第3号, 21-26
- Chiba Takeo, Kanou Akira, Matsuda Sohei, Izuhara Dai, Ishigaki Emiko (1996), Creative Practical Use of Digital Media in Early Childhood Education Part 1 『聖和大学論集—教育学系—』第24号A, 153-160
- 服部弘子・曾根有里子 (1995) 「短期大学部における情報処理教育」『愛知みずほ短期大学部紀要』第12号, 45-48
- 出原 大・黒田実郎 (1995) 「保育実践における電子楽器の効用」『聖和大学論集』第23号, 243-252
- 堀田龍也・湯辺美由紀 (1999) 「幼児がマルチメディアに触れることに対する保護者の意識と行動」『富山大学教育実践研究指導センター紀要』第16号, 33-37
- 市川伸一 (1994) 「メディアを活かした表現活動」『コンピュータを教育に活かす「触れ、慣れ、親しむ」を超えて』勁草書房, 188-212
- JANE M. HEALY (1998), Failure to Connect: How Computers Affect Our Children's Minds, for Better and Worse, Simon & Schuster. (西村辨作・山田詩津夫訳 『コンピュータが子ども心を変える』大修館書店 1999)
- 兼房律子 (2000) 「“表現”における創作活動(2)」『日本保育学会第53回大会研究論文集』, 756-757
- 加納 章・瀧川光治・石垣恵美子 (1997) 「ニューメディアと保育。—保育室にコンピュータを導入して—」『聖和大学論集—教育学系—』第25号A, 141-147
- 小平さち子 (1997) 「幼児教育におけるメディア利用の現状と課題」『教育工学関連学協会連合第5回全国大会講演論文集(第2分冊)』, 739-740

- 厚生省(1999)『保育所保育指針』フレーベル館
- 松田(中村)総平(1989)「遊具としてのコンピュータ利用(2)—探索と表現のメディアとして—」『日本保育学会第42回大会研究論文集』, 66
- 松山由美子(2000)「コンピュータを用いた遊びにおけるコミュニケーション」『日本保育学会第53回大会研究論文集』, 572-573
- 宮川祐一・村野井均(1999)「幼児教育専攻学生のコンピュータリテラシー育成」『教育メディア研究』第5巻第2号, 75-81
- 宮国薫子(1999)「ホームページ作成によるコンピュータ活用能力パワーアップ」『沖繩キリスト教短期大学紀要』第28号, 161-169
- 文部省(1998)『情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて』
- 文部省(1991)『情報教育に関する手引』ぎょうせい
- 文部省(1999)『幼稚園教育要領』フレーベル館
- 村岡公雄・一柳達幸(1997)「短期大学の情報教育に関する一考察Ⅲ」『一宮女子短期大学紀要』第36集, 195-202
- 村上優・倉戸尚実ほか(1999)「保育科学生のためのマルチメディア環境の構築」『日本保育学会第52回大会研究論文集』, 882-883
- 小川哲也・小川敬子(1997)「保育環境としてのコンピュータ—遊具としての問題点と環境としての可能性—」『日本保育学会第50回大会研究論文集』, p 29
- 小倉隆一郎(1994)「MLシステムを利用した音楽教育の可能性について」『秋草学園短期大学紀要』第11号, 44-55
- 大阪芸術大学短期大学部(2000)『履修の手引』
- 佐伯 胖(1998)「高度情報化と教育の課題」佐伯 胖・黒崎 勲・佐藤 学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典編『情報とメディア』岩波書店
- 砂上史子(1998)「コンピュータと保育の問題」森上史朗編『幼児教育への招待—いま子どもと保育が面白い—』ミネルヴァ書房
- 菅谷明子(2000)『メディア・リテラシー—世界の現場から—』岩波新書
- 鈴木みどり(1997)『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社
- 瀧川光治・石垣恵美子(1998)「ニューメディアと保育Ⅲ—日本の保育系学会発表等に見られる研究動向—」『聖和大学論集—教育学系—』第26号A, 149-166
- 田中博之(2000)『ヒューマンネットワークをひらく情報教育』高陵社書店
- 田中博之(1995)『マルチメディアリテラシー—総合表現力を育てる情報教育—』日本放送教育協会
- 梅宮新偉(1999)「栄養士養成コースにおける情報活用能力育成の試み—一般教養選択科目:「情報科学」における授業設計と試行の報告—」『メディア教育開発センター研究報告』vol.7, 139-160
- 山本孝一・佐野真一郎(2000)「幼児教育科学生の情報リテラシに対する調査Ⅱ—ネットワーク入門教育の現状報告—」『日本保育学会第53回大会研究論文集』, 764-765
- 全国保育士養成協議会(2000)『保育士養成資料集第30号 平成11年度期プロジェクトチーム報告』

“Information Education” Curriculum at the Child-Care Person Training Junior College

Yumiko MATSUYAMA*, Ako IMAI**

Computerization in education influences the preschool education scene. To keep up with the information oriented society, it is necessary to train the child-care personnel with compulsory subjects such as *Operation of Information Technology* and *Information Education*, and this has become a new requirement to acquire a kindergarten education license. This research describes and shed light on the current state of information education and media literacy at the child-care personnel training junior colleges. Lastly, ideal information education (i.e. media literacy for the child-care personnel) for the undergraduates to acquire abilities in the information-oriented society was examined.

As a result of pblem of the ideal curriculum, it is suggested that better “Information Education” Curriculum and a system supported the curriculum.

Key words: *Information Education, child-care personnel training, media literacy.*

キーワード：情報教育、保育者養成短期大学、保育者としてのメディアリテラシー

*Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, **Graduate School of Osaka University